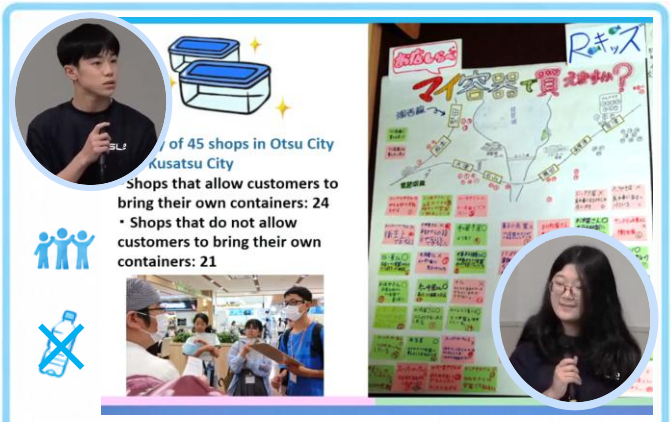
Lake Impact Challenge － 取組発表

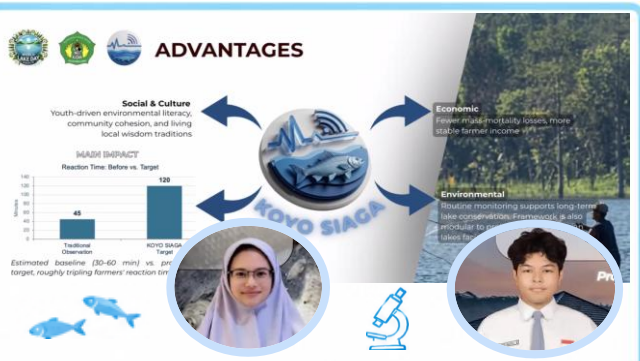


Rキッズによるプラスチックごみ削減に向けた活動

しがローカルSDGs研究会「Rキッズ」

日本

小学生のプラごみ研究会「Rキッズ」は、琵琶湖岸での調査をとおしてプラごみ問題を考える活動をしています。琵琶湖では湖底ごみの約74.5%をプラスチックが占め、マイクロプラスチックも大量に見つかっています。日本では多くの食品がプラスチックで包装されており、それらは使い捨てされて、ごみになります。そこで、プラスチックトレーの代わりにマイ容器で買い物ができるかを地元のお店に聞き取りしたところ、できると答えたのは45店舗中24店舗もありました。それらの情報を「くるん京都」という団体が作る「くるん買い物マップ」で公開しています。



KOYO SIAGA：ラヌ・クラカ湖の「酸素の鼓動」― 地域の知恵を活用した、ラヌ・クラカ湖（ルマジャン）における湧昇被害軽減のための早期警戒システム ―

マン・2・コタ・マラン (マラン市第2国立イスラム高等学校)

インドネシア

私たちは、湖で起こる魚の大量死を防ぐため、水温や水中の酸素量を測るセンサーを使った早期警戒システム「KOYO SIAGA」を提案しています。酸素量の低下などの異変を早く知らせ、養殖業者が魚を守るための対応を取れるようにします。地域の人々が水の色や風、魚の動きなどから異変を察知してきた知恵と、低コストで太陽光発電を利用できるセンサー技術を組み合わせるのが特徴です。地域の養殖業者や学校、行政などと協力しながら、魚の被害を減らし、養殖業の安定と湖の環境を守ることを目指しています。



田んぼ・水路・琵琶湖をつなぐ流域体験学習による価値創出

TANAKAMIこども環境クラブ

日本

私たちは、田んぼや水路、琵琶湖を一つの「流域」として捉え、地域の自然や生き物を調査しています。水路を実際に歩いて調べ、37種類の魚や、これまで地域では確認されていなかったホトケドジョウを発見しました。

また、途切れた水路のつながりを取り戻す自然再生に取り組み、調査で分かったことを地域の方々と共有しています。琵琶湖では、生き物と地域の産業との関わりにも目を向け、自然環境を守りながら真珠産業と共存していくことの大切さについて学んでいます。

さらに、世界湖沼会議などで発表し、海外の人々との交流や新たなつながりにも広げることができました。地域の学びを国際的な交流へ広げられたことも、大きな価値だと考えています。



私たちの湖の持続可能性のために

クルニアワン・パリンドンダヤ・バンジョル

インドネシア

私たちは、インドネシアのポソ湖で、豊かな生物多様性とその生息環境を守る活動に取り組んでいます。固有の魚や貝類、ウナギなどの調査を行い、研究機関や行政、地域の人々と連携しながら、生息環境の保全や植樹、減少しているウナギの放流などを進めています。約5,000匹のウナギを放流し、個体数の回復にも取り組んでいます。

また、学校での環境教育や水生生物を紹介するミニ博物館づくりを通して、ポソ湖の生物多様性について地域の理解を広げています。

さらに、ポソ湖の生物多様性を生かしたエコツーリズムを推進し、自然環境を損なうことなく観光客を呼び込むとともに、環境に配慮した経済活動によって地域の人々の暮らしを支えることを目指しています。



『よそ者』の学生が『島のインフラ』になる

座・沖島

日本

私たちは、琵琶湖に浮かぶ沖島で、人口減少や高齢化によって失われつつある暮らしや伝統を支える活動をしています。祭りの運営や古民家の片付け、耕作放棄地の開墾、漁業体験など、島の方々と一緒に活動してきました。

私たちが大切にしているのは、一時的な支援ではなく、継続して島に関わり続けることです。活動の仕組みや資金づくり、広報などにも取り組み、学生から学生へとバトンをつないでいくことで、島の未来を支える「結び目」になることを目指しています。



大学生と地域の連携による子ども向け『びわ湖の研究者になろうツアー』

NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）
MLGs チーム

日本

私たちは、子どもたちが自然を身近に感じ、琵琶湖の未来について考える「研究者になろうツアー」を開催しています。浄水場や森林、琵琶湖などを舞台に、地域の方々と水質調査や漁業体験、湧き水の調査などを行っています。

特に琵琶湖の漁師さんとの活動では、魚を「捕る・食べる・考える・つなげる」という体験を通して、琵琶湖の環境や未来について学びました。こうした体験を通じて、子どもたちの探究心や環境への意識を高め、地域の魅力を伝えることにつなげています。





バラトン湖の若者のコミュニティ作り/誰もが参加できるネットワーク

西バラトン湖ユースアソシエーション/
エクスタジーユース協会

ハンガリー

西バラトン湖ユースアソシエーション

私たちは、バラトン湖を誇りに思い、若い世代の仲間達が湖の保護に関心を持ち、保護活動に参加してくれるよう働きかけています。

エクスタジーユース協会

私たちは、バラトン湖周辺の青少年団体の活動場所を訪問し、リーダーの方々にインタビューを行っています。そして、その活動場所を地図上に記録します。この地図は、活動のプロセスとコミュニケーションを円滑にし、バラトン湖を単なるリゾート地としてだけでなく、一年を通して魅力的なコミュニティ、文化、レジャーの場として紹介するのに役立ちます。私たちの目標は、同じ地域に住む人々がお互いを知り、助け合い、将来的には共同プログラムを企画することです。私達にとって、バラトン湖は単なる湖ではなく、人々、文化、世代が出会う場所なのです。



琵琶湖から日本、世界へ。大学生による地域と連携した侵略的外来水生植物除去活動

NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）
オオバナチーム

日本

私たちは、琵琶湖で南米原産の外来生物「オオバナミズキンバイ」の除去活動を行っています。繁殖力が強く、生態系や漁業に影響を与えるため、滋賀県や企業などと協力し、定期的に除去しています。

昨年度は約300人で3日間活動し、約4,700平方メートルを除去しました。また、琵琶湖だけでなく京都の鴨川でも活動し、三重県では地元の高校生に活動のノウハウを伝えるなど、取り組みを他地域にも広げています。琵琶湖で培った活動を、外来生物問題に取り組む地域へ広げていきたいと考えています。



高校生は、社会へ出る。
～琵琶湖を通じた高校生の思いとその広がり～

立命館守山高校

日本

私たちは、高校生が琵琶湖を通じて社会とつながる活動に取り組んでいます。探究活動では、企業と連携して琵琶湖の未利用魚をドッグフードに加工し、実際に商品として販売するなど、高校生のアイデアを社会に届けてきました。こうした活動は、新聞やテレビなどのメディアにも取り上げられています。

私たちが大切にしているのは、高校生だけで活動するのではなく、企業や行政と同じ土俵に立って挑戦することです。高校生は企業や行政から資金や活動の機会、さまざまな人とのつながりを得ることができる一方、企業にとってもプロモーションや地域貢献につながるというメリットがあります。本日のような高校生の挑戦を支えるフォーラムを通じて、こうした互いにメリットのある関係をさらに広げ、琵琶湖の環境を守ることにもつなげていく「三方よし」の活動を目指しています。



気づきから主体的な行動へ
―市民科学と都市湖沼での活動を通じたクアラルンプールの若者のエンパワーメント―

プラネット・プロディジー

マレーシア

私たちは、若者と自然とのつながりを深め、環境を守る次の世代を育てる活動に取り組んでいます。都市の湖や緑地では、プラスチックごみや生物多様性の損失に加え、若者と自然とのつながりが薄れていることも課題となっています。

そこで、学校でのワークショップや湖の清掃活動など、若者が実際に自然に触れながら環境について学び、考え、行動する機会をつくっています。知識を得るだけでなく、自然とのつながりを感じ、自ら環境を守ろうとする気持ちを育てることで、若者自身が地域の環境を守る担い手となることを目指しています。



琵琶湖を守る「せっけん運動」の思いを次世代へ

NPO法人愛のまちエコ倶楽部

日本

私たちは、滋賀県東近江市で、地域資源の循環や農村地域の活性化に取り組み、廃食油から石けんをつくる活動を行っています。琵琶湖で赤潮が発生したことをきっかけに生まれた、暮らしを見直し環境を守ろうとする市民運動の精神を受け継ぎ、石けんづくりは45年にわたって続いてきました。

私たちが大切にしているのは、水環境を守ることだけでなく、地域の人と人とのつながりや活動を次の世代へつないでいくことです。若い世代の参加を増やし、子どもたちへの啓発活動にも取り組みながら、石けんづくりを地域の仕事として育てています。琵琶湖から離れた地域であっても、自分たちの暮らしが環境につながっていることを意識し、地域からできることを続けていくことを目指しています。

ユース宣言

世界湖沼の日に、日本、インドネシア、マレーシア、ハンガリーの若者たちが、それぞれの湖や地域で活動を共有しました。場所やテーマは違っても、自分たちにできることを考え、行動しているという共通点があります。

湖には、環境・社会・経済などさまざまな価値があります。湖を守ることは、自然や生態系を守るだけでなく、人と人をつなぎ、地域を支えることにもつながります。

今日の交流を一日限りにせず、地域での行動を続けます。世代を超えて対話し、互いの経験や知識から学びながら、共に考え、行動していきます。

2026年8月27日